

# 『河を渡って木立の中へ』における 祖国と家族

田 中 紀 子

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) が『河を渡って木立の中へ』 (*Across the River and into the Trees*) を書き上げたのは1950年であり、51歳という自らの年齢をそのまま作品の主人公に反映させた。主人公である合衆国陸軍歩兵大佐リチャード・キャントウェル (Richard Cantwell) は、第一次大戦での負傷、狩猟への興味、離婚、18歳の女性への恋心、体の衰えなどにおいてもヘミングウェイの実体験が色濃く織り込まれている。その類似点ゆえに「あまりにも生身の自己像であるキャントウェル大佐<sup>1)</sup>」という印象は否めないほどである。となると、この作品の舞台であるイタリアや、キャントウェルの祖国であるアメリカへの思いにおいても、ヘミングウェイの「生身」の思いが大きく投影されていると考えられる。本稿ではイタリアとアメリカ、イタリア人とアメリカ人のキャントウェルとの関係について整理し論じる。そこにはヘミングウェイの意識が自ずと現われてくることになるであろう。

## I

人が異郷の地で生活している時、死を間近にした時、また兵士が戦場において往々にして思いをはせるのが自分の生まれ故郷であろう。ではキャントウェルのアメリカの故郷に対する思いはどのようなのだろうか。恋人レナータとの会話の中で、彼が幼少時に西部で暮らしていたことが示されている。<sup>2)</sup> また「おれは16の歳にモンタナ国民軍に入った」(227) と言っていることから、おそらくモンタナ州が故郷だと思われるのだが、町の名前までは明らかにされない。彼が「会長」<sup>3)</sup>と呼ぶ親友や他のイタリア人の登場人物、運転手を務めるアメリカ人の青年についてもその出身地が具体的に示されているのとは対照的であり、読者には歯がゆい思いを抱かせる。キャントウェルは「おれは故郷の町でも道を間違えたことがあるんだ」(156) とか、「子供の時には牛の糞の中を歩き、それを足の指の間に感じるのが好きだった」(249) とか、朝食は料理人が用意した、と思いを口にするものの、生まれ育った家、近所の様子、家族や幼友達について具体的に語りはしない。

逆に、読者がこの作品から非常に強く印象づけられるのはキャントウェルのイタリア、特にヴェニスへの惚れ込みようである。第一次世界大戦のさなか18歳で最初に見て感動を覚えたヴェニスの美しさは、30年以上経った第二次世界大戦後の今でも彼の胸を同じように熱くさせるのである。週末この町へと車を走らせ、光り輝く白い家並みが目に入ってくると、「畜生 (Christ)、何て美しい町なんだろう」(34) と感嘆する。ヴェニスは美しいばかりでなく、「不思議な仕掛けの多い町で、ある地点から別の地点へ歩くのはクロスワード・パズルを解くよりも面白い」(45) のであって、「畜生 (Damn)、一生この町を歩き回っていたいものだ」(77) と望む。彼によると「おそらく世界一散歩を楽しめる場所」(45) でもあるのだ。愛してやまないヴェニスについて「若くしてこの都市のために戦ったのだから、おれの町なんだ」(26) とまで思う。作品中随所で彼はこの「おれの町」という言葉を吐き、「この町に愛されるには頑強 (tough) な男でなければならない」(48) と自らを省みる。そして退職手当を受け取ったら「おれはここに住むべきだ」(44) と決意を固める。これに比べてアメリカの故郷の町は「おれの町」と思えるほどの強い引力を有さず、そこへ戻って余生を過ごしたいとは露ほども思っていない。

イタリアにはヴェニス以外にもキャントウェルの生涯において大きな意味を持つ場所がある。1918年の夏に戦傷を負ったフォッサルタ近辺の河岸である。それまでは軽傷のみで、自分には死は訪れるはずがないと自信を持っていたのだが、この負傷で自らの生の危うさ、存在の卑小さを思い知らされたのである。この出来事が彼に与えた衝撃は多大なもので、その後彼の心に影を落とし続けることになり、「不死身であることを失った。ずいぶん大きなものをなくしたのだった」(33) と今にしてふり返る。砲弾と自分の血が埋まっている正確な地点を探り当てて排泄をし、さらに1万リラ紙幣を埋めることで「記念碑」(18, 19) を築くのである。このように自分なりの儀式を身をもってとり行なうことにより、心の中でけりをつけなくてはならないほどの重要な場所であったのだ。興味深いのは「祖国」という語を彼がここで用いていることである。

これは素晴らしい記念碑だ。ここにはすべてがある。肥料と金と血と鉄と。まるで一つの国のようだ。肥料と金と血と鉄のあるところには祖国 (fatherland) があるのだ。(19)

つまり、キャントウェルにとっては自分が生まれたアメリカが心の祖国ではないのだ。脳震盪の発作に何度も襲われるようになり死期が遠くないことを感じ取った彼が、どうしても立ち戻らざるにはいられなくなった自らの原点はイタリアにあったのだ。それゆえ死後の埋葬も「祖国」イタリアに、と願うことになる。ヴェニスの手前のプレントア河に

沿った静かで美しい土地が具体的な埋葬の希望地として挙げられている。

おれは庭園の端の方に埋められたい。ただし古くて優雅な屋敷と高く大きな木々の見える所に。大して他人の迷惑にはならないだろう。おれは大地の一部になって、子供たちがその上で朝に夕に遊ぶのだ。子供たちは馬に跳ぶ練習をさせ、その蹄が芝生の上で音を立て、池で蠅の卵がかえれば鱒がはね上がるだろう。(35)

自分が葬られた地面で子供たちが楽しく過ごす平和な風景を夢見ているわけだが、キャントウェルには血を分けた子供はいない。彼が幸せを願う「子供たち」とは彼が愛するイタリアに生まれ育つ子供たちなのである。

## II

アメリカの故郷の町への言及が極めて少なくまた曖昧であることはすでに述べたが、それ以外のアメリカはどのように扱われているのだろうか。この作品におけるアメリカのいくつかの町についてキャントウェルはどのような感情を持ち、どのような評価を下しているのだろうか。

作品で最初に名が挙げられているのはインディアナ州ハモンドであるが、不快な町として紹介されている。ヴェニスの中でもキャントウェルが気に入らない地域であるブレダの冶金工場が建っている所は「みじめな光景 (miserable view)」であり、「彼はいつも嫌っていた」(35)と書かれていて、この地域を彼はハモンドに似ていると思うのである。ハモンドとはミシガン湖に近く第二次大戦中からの軍需産業で人口も急成長を遂げた工業都市なのである。町の風景を侵食する工場の醜さ、短期間に急激に利益を得ることへの嫌悪は町だけでなくそれに関わる人にも向けられる。キャントウェルはヴェニス市内へ向かう船に乗る前に立ち寄った酒場で一組の男女を見かけるが、片方は一見して戦後成金とわかる「ミラノ人にしかない意地の悪そうな肥満男」、他方は「非常に魅力的だが金遣いの荒そうな情婦」で、「そういう輩ならではの行儀の悪さを丸出しにして自分の方をじろじろ見た」(38)という敵意むき出しの表現となっている。

同じような点からアメリカの大都市シカゴも槍玉に挙げられていて、「シカゴは北も南も頑強だが、行儀を心得た人間は一人もいない」(36)というキャントウェルの言葉には強い軽蔑がこめられている。ヴェニスでは「ひとり歩き (solitaire ambulante) をすれば目と心の幸せを得ることができ」(185)、家々や商店、レストラン、古い宮殿などを眺めながら袋小路に入りこまずに市場へ行き着くというゲームを楽しめるのだが、アメリカの都市には長い歴史のうちに出来上がった彩り豊かな町並みはなく、ヴェニスでのゲームなど味わうことのできない、がさついた魅力のない所としてみなされている。

キャントウェルは「今のおれたちはカスのような連中に支配されているのだ。淫売女が煙草の吸殻を放りこんだ、気の抜けたビールのグラスの底にたまったカスみたいな奴らに支配されているのだ。あの国 [=アメリカ] はまだ掃除がされていず、素人ピアニストに箱を叩かせているみたいなものだ」(227) と言ったり、朝食の注文の際に「アメリカ製のものなんかおれ以外はくたばっちまえ」(177) と罵ってみたり、そもそも合衆国陸軍に所属しているのにアメリカへの忠誠心は一度として語られない。これらのキャントウェルの言動から判断すると、彼にとってアメリカは忌み嫌う国となっているかのようである。

しかし、アメリカの自然について話す時のキャントウェルの態度は異なっている。彼はヴェニスを形容する際に「頑強な」という語を使うが、自分が重要視する特性のこの「頑強さ」について運転手に語るうちにシャイアン、キャスパー、クック・シティへと連想をつなげてゆく。シャイアンとキャスパーはワイオミング州にあり、一方は州都、他方は州で第二の都市である。またクック・シティはモンタナ州、イエローストーン国立公園の北東の入り口にあたる町であり、これらの町に共通する点はアメリカ北西部の大自然の中に位置するということである。水の都ヴェニスに無いものこそがこの自然である。レナータに「アメリカまで行かないと本当の木を見たと言えないよ」(205) と彼は語り、ストロブ松やポンデロサ松を見せてやりたいと言う。この他にハヒロハコヤナギ、ヤマナラシ(265) といった名前も彼の口をついて出てくるが、その際の彼は得意げでさえある。決してアメリカすべてを嫌い脳裏から捨て去ろうとはしていないのだ。

結局は果たせない夢として終わってしまうが、レナータと訪れたいと願うアメリカとはカンザス市を出発点としてワイオミング州のシェリダンに至る道程となっている(263-265)。成金を嫌うキャントウェルではあるが、カンザス市で見た人々の派手な金の使いぶりには不快感をもよおさず、むしろ「景色がとてもきれいだった」(263) ことで彼に選ばれている。シェリダンまでの途中に立ち寄る町として挙げられているのはミズーリ州のセント・ジョーとルービドー、ネブラスカ州のチムニー・ロックとスコッツ・ブラフ、ワイオミング州のトーリングトンなのだが、これらはすべて西部開拓時代に陸路として移住者が夢を抱いて通ったオレゴン・トレイル上の町である。この夢物語の道中に故郷のモンタナ州の町を含むことをキャントウェルはしないのだが、西部に惹かれるということは、キャントウェルの中に生粋のアメリカ人精神が根づいていることに他ならない。機械文明の侵食作用を受けていない豊かな大自然は、彼が高く評価し心の中に大切にとどめているアメリカなのである。

### III

作品の中でキャントウェルが実際に言葉を交わすアメリカ人は二人しか登場しない。

彼らはキャントウェルと同じ合衆国陸軍に所属するアメリカ人で、彼より一つ下の世代に限られている。この人物たちにより、アメリカ人のどのような特徴が示されているのだろうか。

最初に登場するのはウェス (Wes) というファーストネームのみ示される軍医である。「29年とか30年には僕は子供でした」(10) と話していることから計算すると、この時20歳代後半となるであろう。キャントウェルとはかなりくだけた口調で言葉を交わせる間柄だが、彼は鴨撃ちに誘われると、「鴨ならマディソン通りのロンシャンでつかまえますよ」(11) と冗談まじりに断る。つまり「夏は冷房が効いているし、冬は暖かい」ニューヨークの高級レストラン・ロンシャンで鴨料理を食べる方がいい、というわけで、「そうなのか、都会っ子め」とキャントウェルに言われる。狩猟という趣味を共有し、野外においてアメリカ人らしさを共に発揮できる者は同じ軍隊にはいず、この面において彼は同国人といっても孤独である。

若いアメリカ人との価値観の違いは次に登場する人物によって、より明確に示される。それは、キャントウェルの最後の旅において運転手を務めるロナルド・ジャクソン (Ronald Jackson) である。彼はワイオミング州ローリング出身、TS100678という番号で合衆国陸軍に登録されている歩兵である。四方を山に囲まれた高原の小さな町ローリングならばキャントウェルお気に入りの西部なのだが、彼はこのジャクソンにあまり好意を持っていない。これは、以前にも触れた「頑強」という言葉についての二人の定義が異なっていることにも示されている。(36) キャントウェルはジャクソンを「よい運転手」(12) と認めはしても、軍人としての評価は非常に低く、「どんな意味においても兵士ではなく、自分の意志に反して軍服を着せられた男である。そして個人的な目的で軍隊に残ることを決意したにすぎない」(22) と実に手厳しい。その愚痴は「会長」に向かってぶちまけられる。「あの若者は何ですか？ 例の悲観したアメリカ人ですか？」と尋ねる「会長」に答えて、「そうなんだよ。やれやれ、ああいうのがうんといふんだ。悲観的で、独りよがり、栄養ばかりよくって、訓練はなっていない」(58-59) とけなす。

ジャクソンに対する不満は、軍人として未熟であるだけでなく、知識が浅薄であることから生じている。現在駐屯しているイタリアへの関心が少なく、19世紀末から20世紀初めにかけてイタリアで最も重要な作家とされたガブリエル・ダヌンツィオ (Gabriele D'Annunzio, 1863-1938) の名前を知らない。<sup>4)</sup>ダヌンツィオのかつての屋敷を示してもらっても、ジャクソンは「なかなか实用向けの家ようですね」(51) というコメントしか述べない。キャントウェルは一言「小説家だ」とジャクソンに言ったあと、「小説家、詩人、国民的英雄、ファシズムの弁論術の発明者、不気味な利己主義者、飛行家、初期快速魚雷攻撃艇の指揮者または搭乗者、連隊どころか小隊の指揮のやり方も

知らない歩兵中佐、我々が尊敬し、かつ反発する大作家、美しい『夜曲』の作者だ」(51-52)と立て続けに小声でつぶやく。作家としてもはやされたばかりでなく、このようなスケールの大きさを見せたイタリアの有名人を知らないということで、キャントウェルは大いに幻滅を感じるわけである。そのうえ、ジャクソンの美術への理解ははなはだお粗末である。キャントウェルが名前を出した著名な画家たち、すなわち13世紀から15世紀に宗教画を残したジョット、ピエロ・デラ・フランチェスカ、マンテーニャのどれも知らないし、ミケランジェロについても何の反応も見せない。義務感から訪れたフィレンツェの美術館がウフィツィであったか、ピッティであったかも覚えていない。聖母子を描いた絵画がイタリアには多いという感想をもらすのだが、彼の解釈は「(イタリア人は) 食うものに事を欠けば欠くほど、赤ん坊を作りたがってたくさん生まれてくるんだ。あの絵描きたちも、きっと他のイタリア人と同じで赤ん坊が大好きなんだ」(15)という段階にとどまっている。また「食堂か街道沿いの居酒屋か旅館でも持つようになったら」(16)風景画の一枚くらいなら将来買い求めてもいい、という程度の絵画との付き合い方である。精神的、宗教的な感動とは無縁の無教養な人物として描かれているのである。

そのようなジャクソンではあっても、キャントウェルは自分の気に入っている景色を指し示し、またヴェニスを建設した人々の出身地トルチェッロの町について教えてやり、ジャクソンの方も「確かに嫌味な奴だが、おそろしく感じのいい時もある」(37)と思う。キャントウェルは自分が死んだ際には読んで従うように、とメモ書きをジャクソンに渡すのだが、ジャクソンは「いずれ当局が適当な機関を通じて間違いなく返却するだろう」(308)と思うだけで、命じられていた物の返却を自ら引き受けるという行動をとらない。「おれはただ命令を与え、命令に従うだけだ」(277)と軍人としての使命を自覚していたキャントウェルの心構えは、部下のジャクソンには伝わらなかったのである。南北戦争における偉大な英雄として知られるトマス・J・ジャクソン<sup>5)</sup>の「さあ河を渡って木陰で休息しよう」という最後の言葉をキャントウェルから聞かされていたジャクソンであったが(307)、同じ名前が異なった時代の全く異質の軍人に付けられていることになり、皮肉な効果を上げている。キャントウェルと次の世代のアメリカ人とでは価値観や生きる姿勢が異なり、両者の間には深い心のつながりは築かれないのである。

ヴェニスの町に不似合いなアメリカ人はジャクソン以外にも登場する。「アメリカ領事館のくずども (riff-raff)」(72)と「会長」も見下す連中である。彼らに対するキャントウェルの思いは次のように書かれている。

アメリカ人と一緒には飲みたくない。おれにはわかっている、奴らは退屈なのだ。この町にいてさえそうなのだ。この町でも退屈しているのだ。住居は寒いし、俸給

はわずかだし、燃料はべらぼうに高い。奴らの細君たちは立派だ、ケオクックからヴェニスまで勇敢にもやってくるのだから。奴らの子供たちはヴェニス生まれの子供たちのようにもうイタリア語を喋っている。おい、写真をパチパチ写すのはやめてくれ。今のアメリカ人は写真を撮って、酒場で内緒話をして、望んでもいないのに友達ぶって酒を勧めるし、女の子相手に領事館の勤めについてくどくどと泣き言を並べるんだ。(72-73)

「みんな丁寧で行儀がいい」(36) と評されるヴェニスの人々とは違って、これらのアメリカ人はヴェニスでの滞在が長期化してもその興味は観光客としての表面的なものより深まることはない。ケオクックという地名をここで使ったことにはヘミングウェイなりの工夫があったのだろう。ケオクックとはアイオワ州南東部、デモイン川がミシシッピ川に注ぎ込む地点に位置する町である。すなわちアメリカ内陸部の田舎町で、ヨーロッパの都市とは物理的に大きく隔たっているだけではなく、ヴェニスと同様に水に面してはいても、気質の異なった住民を生み出しているのである。ヴェニスから得られるはずの歴史に培われた奥行きのある文化を鑑賞することができない即物的なアメリカ人への批判が、ケオクック出身の人たちを通して行なわれている。

また、キャントウェルとレナータの次の会話にアメリカ人の別の特徴が示されている。

「今いくつかね。」

「もうすぐ19よ。なぜ？」

「それがどういう意味かわからんかね？」

「わからないわ。どうしてわかるはずがあるの？ アメリカ人は皆いなくなる前にそう言うのよ。どうしても言わなければいられないみたい。」(82)

レナータの素朴な疑問の中にイタリア人と異なるアメリカ人の意識、つまり若さを重視するアメリカ人の傾向が指摘されているのである。

おそらくキャントウェルとほぼ同年代と思われるアメリカ人は一人だけ登場するが、この人物はずいぶん奇妙な描かれ方がなされている。「イタチががっかりしたような顔」だとか「安物の望遠鏡で見た月の山々のようなあばた面で、ゲッペルスに似ている」(87) とその容貌が徹底的にこき下ろされているこの男はシンクレア・ルイス (Sinclair Lewis) がモデルとなっている。<sup>6)</sup> 実在の人物に対して腹に据えかねる感情を持った時、それが誰か特定できるような人物を作中に登場させることはヘミングウェイがよく行なったことであるが、作家であるこの人物はアメリカ人旅行者の多くに見られる特

徴を見せている。彼は旅行案内書 (Baedeker) を携えてヨーロッパの名所を足早に巡り、有名人に好奇心をあからさまにするのである。また、興味津々の目つきで周囲を見渡し、何でも題材にして作品を量産する作家たちに対してヘミングウェイが抱く不快感の対象ともなっている。キャントウェルの態度はそのような作家たちとは対照的である。実際に参加して様々な事実を知っている戦争について書くべきだ、とレナータから再三勧められると、戦場を体験していないのに儲けようとして書く嘘つきの作家たちをまず批判したあと、「誰でも遅かれ早かれ自分の本を書く。だけどおれは書かないのだ」(137) と断固として拒否する。世間に対する自己弁明を行わず寡黙のまま人生を終えようとする一種の英雄的な態度が浮かび上がらされているのである。

アメリカ女性についてのキャントウェルの口調は非常に辛らつである。あばた面の作家と一緒にいる女性を描写した箇所がまず面白い。年配の健康そうなこの婦人は、アメリカの雑誌『「レディーズ・ホーム・ジャーナル」』の挿絵に描かれたアメリカ的な母親」をキャントウェルに連想させる。毎号読み通しているこの雑誌について「すばらしい雑誌だ、なぜって性の科学と見事な料理の組み合わせだからだ。おれにその両方の欲望をもたせる」(87) と彼は言う。即物的なアメリカ人を生み出すばかりで、文化を高次のレベルに引き上げようとしないジャーナリズムを皮肉ると同時に、アメリカ女性は性欲と食欲の次元に留まっていると言うのである。

アメリカ女性の教養の低さについてはキャントウェルの次のような独り言がある。

我々の国では、本当に美しい娘というのはテキサス出身で、せいぜい今が何月か言える程度だ。もっとも、みんな勘定はうまいがね。勘定の仕方と、脚をぴったりにくっつけていることと、ピンカールを付けて髪を上げるやり方くらいは教わるんだ。(178)

さらにこれまでに会った女性たちは急速にその美しさを失った、とふり返り、「我々の国の美人はたいていソーダ店の女給上がりで、自分の祖父の姓さえ知らないのだ」(247) と言いきる。また、社会進出を志し野心に燃えるアメリカ女性へのキャントウェルの鬱憤は、別れた妻に集中的に向けられる。新聞記者だった彼女について「ナポレオンよりももっと野心家だった。普通の高校の優等生程度の才能を鼻にかけていたのだ」、さらに彼との結婚の動機についても「軍人仲間の中で地位を高めて、上の人たちと接触を持って、自分の職業や芸術のために有利にするためだったのだ」(212) と腹立たしげに回想する。挙句の果てに「おれが離婚後の扶養料を払っているあの女は子供を生むことさえできなかった。そのためにもらった女だったのに」(272) とまで独り言でつぶやく。大戦後のアメリカでは男性と同等に職業面で活躍する女性の数が増えたのだ



が、家庭にとどまり子供をもうけることから遠ざかり、剥き出しの野心ゆえに謙虚さをなくしがちな彼女たちの傾向が、元の妻への批判を通して表わされているのである。

#### IV

イタリア戦線での体験、イタリアへの愛情を共有できるのは同じ時期同じ地域で同様の体験をした者しかいない。だが、キャントウェルが母語の英語で気心を許して語り合えるアメリカ人は全く登場せず、彼にとって心的距離の近い人々はイタリア人に限られる。

キャントウェルが深い愛情と敬意を寄せ、最も近い「仲間」として大切に思っているのは、彼が「会長」と呼ぶ人物で、大戦中軍曹を務めた二歳年上のイタリア人であり、パズビオ、グラッパ、ピアーヴェ河という同じ戦場を経験している。今ではこの退役軍人は第一級のグリッティ・ホテルで給仕頭の職に就いている。彼らの他に選りすぐりの三名を加えて「高潔にして信仰心厚き軍人のブルサデーリ騎士の結社」(60)と自分たちを名づけている。この「会長」についての描写には賛辞が連ねられており、「男らしく、真に内面からりりしく、その微笑は心臓かどこか、体の中心から発して、素直に美しく、表面つまり顔に現れている」、さらに「優しく陽気で真実のこもった目、年齢にふさわしい立派な白髪」(55)の持ち主であると書かれている。<sup>7)</sup>二人が再会する場面では、同じ結社に属する兄弟として、また「何度も戦火に見舞われ、敗北しながらも常に勝ち誇っている古き国土への愛情においての兄弟」(55)として握手が交わされる。すなわちイタリアへの愛情という点においてもしっかり結びついているのである。キャントウェルのために好みの酒と旬のおいしい料理を用意し、言葉の使い方も慎重で常に控えめである。さらに彼が18歳の恋人を伴っている時には「愛情をもって妬みは抱かず」(269) 暖かく見守ってやることができる友人である。この「会長」は低血圧、潰瘍、心臓の発作、借金といった問題を抱えてはいるものの、「幸せかね？」と尋ねられると「いつもですよ」(61)と落ち着いて答える。ほかの人に対してその家族の具合を尋ねることを怠らないキャントウェルであるが、この「会長」との間では家族が話題に上らない、ということから一人暮らしだろうとの想像もできるのだが、彼は安定した精神状態で日々を送っている。「今生きていて、それを味わい楽しんでいる老兵の常に幸福そうな顔」(270)はキャントウェルが理想とする老境なのであろう。自分の肉体の危うさを知って心穏やかになりきれないキャントウェルは、この友人を訪れて戦争の回顧談に花を咲かせ、時にはスペイン語で語り合うという楽しみも分かち合って大いに癒されるというわけである。

キャントウェルと同じ年頃の他のイタリア人として二人の船頭が登場する。一人はヴェニスへ向かうモーターボートを操縦する男で、彼の兄弟は5人全員戦死したことをキ

ヤントウェルは知る。そのボートには一旦捨てられた自動車のエンジンが改造して取り付けられていて、「動きのすべてが老いた機械の雄雄しい勝利」(52)とヤントウェルには感じられる。戦争における悲惨な体験に心を揺すぶられ、船共々頑強に生きているこの船頭に同情し、もっと良いエンジンを手配してやるとの約束を繰り返すことになる。

もう一人はタリアメント河の鴨撃ちの際の船頭である。最初から彼のヤントウェルへの態度はとげとげしい。ぶっきらぼうな答え方をしたり、初心者に対するような偉そうな言葉を発したりする。また「乱暴に」(4)「腹立たしげに」(6)氷を割ったり、木製のおとりの鳥を「まるで汚らわしい物でも捨てるかのように」(4)投げたり、「すべての動作にはっきり見てとれる憎しみ」(6)を表わす。作品の冒頭で示されるこういった彼の挙動の原因は不明にされたまま、ヤントウェルのヴェニス訪問の回想へと話は移ってしまう。小説の終わり近くになって、場面が再びタリアメント河へと戻るが、ここでは船頭はヤントウェルの方へ飛んできそうな鴨を撃つという、「狩りにおいては最も悪質な行為」(280)に出る。人生の終わりを感ずるようになっているヤントウェルにとっては「生涯で最高に楽しい」(281)狩猟を望んでいたのに台無しにされてしまうのである。しかし、猟を終えて引き上げる時には「二人は完全に対等な立場で協力して作業にあたった」(296)となっている。そして、ヤントウェルが差し出した酒を飲んだ船頭は自らの行動について謝り、「ありがとうございます、旦那のグラッパは本当にうまいですな」(298)と態度を軟化させる。彼と別れてから、その不可解な言動の原因をヤントウェルは友人から聞かされる。この船頭は第二次世界大戦中に妻と娘を敵軍の兵士たちに強姦されていたため、連合軍の軍服を着用していたヤントウェルに憎悪を抑えられなかったというのである。戦争により大きく傷つけられた船頭の心ではあったが、それが少しでも和らぎ、以前の敵国の大佐との間に歩み寄りが成立したわけだ。ヤントウェルとアメリカ人の登場人物との関係が相互理解、深い愛情へと向かうことは見られないが、イタリア人とはこのようにプラスの方向への変化も描かれているのである。

若い世代のアメリカ人に対してヤントウェルは嘆かわしさを感ずっているが、イタリア人の中にも似たような若者はいる。一緒に歩いているレナータに向かって無遠慮に口笛を吹く水兵もいれば、ヤントウェルの白髪、癖のある歩き方、性的能力の衰えなどについてふざけて話しながら通りすぎる男たちもいる。目上の者に対する敬意を持たず、「ろくな教育も受けていない奴らだ」(187)と彼は苦々しく思う。しかしながら、これらの不屈き者を相殺して余りある付き合いのできる若者たちが別にいるのだ。ヴェニスの手前で立ち寄った酒場のバーテンとは冗談を交わし、「羊となって百年の寿命を保つよりは、ライオンとなって一日で死んだ方がました」(40)と、生き方についても話をしあう仲である。グリッティ・ホテルの給仕アルナルドには以前撃ち取った鴨を渡して

やったことがあり、これに対してアルナルドは自分の金で買ったジンとソーダをホテルの部屋に前もって用意しておき、キャントウェルを喜ばせる。また、二十代前半のアルヴァリート男爵の微笑については次のような一段落を設けて解説されている。

それは自信家の気楽なにやにや笑いでもなく、極度に忍耐強い人間や悪意のある人がする他人を切りつけるような微笑とも違っていた。廷臣や政治家の平静でわざと取り繕った微笑とも何の関係もなかった。それは深く暗い穴の底、井戸よりも深く、深い炭鉱のように深い内心の奥から浮き上がってくる、不思議なまれにしか見られぬ微笑であった。(129)

「会長」の微笑とも通じる描写で、この内気で控えめな若者にはキャントウェルは好意を感じていて、その射撃の腕も良く鴨撃ちに同行することを楽しみに思うのである。

アメリカ人女性には厳しい目を向けていたキャントウェルであるが、彼にとって19歳になろうとしているレナータは非の打ち所のない理想の女性となっている。しかし当初から彼女についての批評家の評価は低かった。大人の女らしさを少しも感じさせず「全く素直で聞き分けの良い幼な妻で、人を圧するナルシズムを持つ大佐の話し相手としての役を果たすだけである<sup>8)</sup>」と書かれ、1990年になっても、「彼女には生きた声がほとんど無い」とされ、「単に見られ、賞賛され、望まれるために存在している<sup>9)</sup>」と断定されている。確かに外見的な美しさ、内面的な優しさにおいて彼女は完璧な女性として描かれている。キャントウェルが愛するイタリアに生きる彼女は、彼自身もつぶやくように、彼にとっての心の拠り所、「祖国」(227)となっていて、励まし癒すという母親的な側面も見せる。しかし、彼女は大佐の希望を拒絶できる強さを持った人間でもある。自分は名門の旧家の一人娘であり、兄が戦争で亡くなっていることもあって、その血筋を守ってゆく義務を心に命じている。そのため気が弱って甘えを見せるキャントウェルが結婚や子供をもうける話をすると相槌を打つことはあっても、アメリカ人であり50歳の彼の求婚はきっぱり退ける。さらに彼女は、彼から戦争にまつわる話を聞き、英雄の本質について教わり、彼の長所をもしっかりと把握している人物となっていることはもっと重要視されてよいであろう。彼女が大佐を愛した理由とは「朝、攻撃があらうとなかろうと、一度も悲しさを感じたことのない人間だったから。苦悩や悲しみを経験したことはあったが、朝悲しくなることはなかったから」(289)と説明されている。また「偏見を持たずに絵画を見、開かれた心で書物を読み、人生を生きればよい」(211)と大佐が彼女に語る場面もある。そして、この生に対してひるまず広い視野を持ち続けるようにとの人生訓を彼女は継承してゆく。キャントウェルははるか年下の恋人であるレナータを繰り返し「娘よ」と呼ぶが、真の意味で彼女は彼にとっての娘となり、その名

前のおり彼女の中に彼は「再生」してゆくことになる。

これまで見てきたように、『河を渡って木立の中へ』の主人公キャントウェルにとっては、実際に生まれ育った祖国アメリカはその西部の自然こそ魅力を失ってはいないが、晩年を過ごしたいという気持ちを起こさせるほどの吸引力を有していない。十代で戦傷を被ったフォッサルタ近辺の方が彼の心を大きく占め、特に長い歴史と美しい街並みのヴェニスに深い愛情を持ち続けており、イタリアが彼にとっての「祖国」となっている。また機械文明、物質主義に損なわれて浅薄になってゆくアメリカ人からは心が離れる一方であり、家族について口にするものもなければ、別れた妻については恨みつらみしかない。彼が関係を大切にするのはイタリアの人々であり、家族に近い感情を抱く相手とは戦争を共にいかくぐった同世代のイタリア人であり、その内面を受け継いで子供の役割を果たしてゆくのは若いイタリア人女性なのである。

1949年当時のヘミングウェイは母親には反感を持ち続けていたものの、息子達との交流については問題がなく、4番目の妻メアリーと結婚して4年目で、家庭生活は安泰であったはずである。メアリーと共にグリッティ・パレス・ホテルやハリーズ・バーなどを訪れた折にイタリア人全般に対して持った好意は、そのまま作品に表わされている。19歳のイタリア女性アドリアーナ・イヴァンチックと出会い、釣りや狩猟を共にし、「娘」と呼び、恋愛関係を夢見ることはあってもそれはこの作品で大いに膨らませて昇華させて解消したようである。

この作品の執筆当時のヘミングウェイの自宅はフロリダ州キーウエストにあった。キーウエストにしろ、キューバのハバナにしろ、また最後の居住地となったアイダホ州ケッチャムにしろ、彼は自然の中に住処を構え、故郷であるシカゴの郊外オーク・パークを訪問することは減多になかった。都会として彼が愛したのはパリ、そしてヴェニスであり、アメリカの都市に贅辞を送ることはなかった。このようなヘミングウェイのアメリカに対する意識が『河を渡って木立の中へ』には如実に現われていると考えられる。

#### 注

- 1) 大橋健三郎「アメリカ性ということ—ヘミングウェイ生誕百年に憶う」、『ユリイカ』8月号（青土社、1999年）、p. 57。
- 2) レナータは“Did they talk like that out West when you were a boy?”とキャントウェルに尋ねている。Ernest Hemingway, *Across the River and into the Trees* (New York: Simon & Schuster Inc., 1996), p. 207. 以後この作品からの引用はカッコ内にページ数を示す。
- 3) 原文では“Gran Maestro”および“Grand Master”となっている。ここでは大久保康夫の訳語「会長」を採用する（『河を渡って木立の中へ』、三笠書房、1964年）。
- 4) ヘミングウェイは“D’Annunzio”という詩を1920年から21年にかけて書いている。これは

死後1979年に出版された 88 *Poems* に収録された。

- 5) Thomas Jonathan Jackson (1824-1863). 南北戦争の際、南部同盟のロバート・E・リー将軍下で最も有能な中尉で、米軍史上傑出した戦術家の一人とみなされている。ファースト・ブル・ランの戦いでの勇壮な姿を「岩壁のようだ」と称されて以来、Stonewallと呼ばれるようになった。北軍と間違えられて受けた負傷と肺炎で死ぬが、この小説のタイトルは彼が息を引き取る間際に言った“Let us cross over the river and rest under the shade of the trees”が元になっている。
- 6) 1949年3月頃グリッティ・ホテルに滞在していたシンクレア・ルイスが、ヘミングウェイの俗物根性と作品の乏しさを妻メアリーに向かって批判し、それをあとで聞いたヘミングウェイはホテルの給仕長に「ルイスは月面みたいなあばた面で、旅行案内書を片手にやって来た田舎者だ」と言ったことになっている。Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969), p. 471.
- 7) 「会長」の笑顔の爽やかさについては別の箇所でも「まるで太陽が昇るように確実に浮かんでくる最良の晴れやかな微笑」(138)と述べられている。
- 8) Maxwell Geismar, “Across the River and Into the Trees,” *Saturday Review of Literature*, 33, September 9, 1950 in *Ernest Hemingway: The Critical Reception*, Robert O. Stephens, ed. (Burt Franklin & Co., 1977), p. 295.
- 9) Brian Harding, “Ernest Hemingway: Men With, or Without, Women,” *American Declarations of Love*, ed. Ann Massa. (Houdmills and London: The Macmillan Press Ltd., 1990), p. 117.